國定忠次 (73)

長谷川伸作
岩田専太郎畫

千両箱ツ人（九）

がたがた。ばたん。

火鉢玉が後ざがりの足を、寂所の敷居代りに取られ、

『あッ』

といふ間もなく、仰向け火の字背中と尻を先に、寂所流兵の山の上へ引ッ繰り返つた。痛いので顔中を歪にしてゐる。

忠次郎は鉄に張りついてゐる。

ヤマ猿は鉄の前へ、にッこり笑つて近寄り、

『岩公はあすこで寝たから今度はお前達の番だ。どんな風に勝負をつけやうな』

相談のやうなことをいふ。ヤマ猿は眼をきよときよとさせ、

『恐かつた。勘弁してくれ。もう懲りた。本當に懲りた』

『なあに無理に懲りねえでもいゝ。又、今井へでも上田へでも鉄を稼ぎねえ、俺が又來てやるから』

『もう出られねえ、だれが何といひ

『岩公め背中が痛えとみえる。伊八、他は何ともねえか』

『へえ。何ともありません』

『持つてゐた物をこいつらに奪られやしねえか』

『銭ですか、はじめから一文も持たねえんだから奪られつこありません』

『それじや、痛い目させられただけが損だな。ではと、ヤマ猿』

『へい』

『渡島入館山の上りを受取らう』

『済みませんが、そいつだけはご勘弁にあづかりてえ、さもねえと後で酷えことになるから』

『さうは行かねえ。上りをこつちへ受取らねえと、だれの持場所たかはッきりしねえ』

『いけませんか』

『馬鹿なよ未練に』

『では、じやあ仕方がえからね出せ』

胴頭布を受取つた忠次郎が、

付けても、俺あもう吃とやられた』

『そんなに懲りたか』

『へえ、全く懲りました』

ヤマ猿がこれだから、ピン一やん勘助は伏眼になり、忠次郎が眩しいらしい顔をしてゐる。本能は起てゐられないで、さつきから坐てゐる。

『それじや、お前、伊八をつれてこい』

捕ざれたのは勘助だ。

『へい』

伊八を連れに押入へ、飾り急いたので、畳の縁へ足の指を突ッかけて躓んだ。

『早くしろ早く』

『へい、只今』

押入の中に伊八は、うしろ手に縛られ、猿轡をはめられ、足まで縛られて投込まれてゐた。

手足が自由になつた伊八は、

『伊八、迎へにきたよ』

『親分、ご心配かけて済みません』

紙まり悪さうに頭をさげた。忠次郎に軽く

『たいした事でもねえから良いや、そこでと』

台所をみると、火鉢玉は漸く道兵の山から下りて、梯の間に届んでゐる。

『伊八、この上り包む物は何かねえか』

『あります』

伊八が片袖をぴりりッと引切つた。

『へえ』

『そこでヤマ猿、聞きてえ事がある。今井瀬島へ何たつて盆を布いた』

『そ、そりや、そこにゐる岩さんが鉄石さんにさう云はれて、それで布いたんで』

『島村の伊三は今井が俺の持場所だつてことを知つてゐて盆を布かせたんだ、さうだな』

『それはよく知られえけど』

『何をいつてやがるでえ。どうで手前たつて今夜俺に、上りと、伊八を受取つて行かれれば、佐位、那波、新田あたりにや居られやしねえ、一年か二年は旅と極まつてしまつてゐらあ』

『そりや さうだ、出たくは ねえが、親分に合はせる顔がねえ、旅より他に仕様がねえ』

『帰つてきた時分にや、島村一家なんてものは根絶やしになつてゐるから』

『それはどうだか』

『まあ見てゐろ。伊八、行かう。上りを持つて行くのを忘れるな。では、俺は引揚げるが、何かいふ事がお前達はあるだらう』

妻（つま）【49】

小島政二郎作　宮田重雄繪

鬼のゐない間（一）

小島の家を辭して、バー・ヴァイオレットへ廻ると、間もなく、電話のベルが鳴つた。

「モシ〳〵」

受話器を耳に當てると、雅子の聲が流れ込んで來た。

「あの、國から電報が來てね、母が病氣だから、すぐ歸れッてのよ」

「まあ、餘ッ程惡いの？」

「さうだらうと思ふの。で、私大急ぎで歸つて來るわ。では、後お願ひするわ」

「えゝ」

「何かあんたの家へ言傳なくつて？寄つてゐる暇があるかないか分らないけれども」

「何もないわ。でも、若し暇があつたら、どんな暮らしをしてゐるか、樣子だけでも見て來てくれない」

「えゝ、いゝわ。——私、今のつもりでは、一晩泊りで歸つて來る豫定でゐるけれど——。長くなりさうだつたら、電報で知らせるから——。お會計の方は、一晩づつキチンと締めて、私の帳面へ記入して置いて頂戴ね」

「えゝ」

「十一時半頃汽車で、少し過ぎのは明日歸しよ。——分つてゐるわね」

「えゝ、分つてゐるわ」

「お母さや——」

「行つて入らつしやい。皆さんに宜しくね」

それで電話は切れた。

その晩、會計を濟ませて、總ての金額を持つて、夜更けて家へ歸つて來ると、

「やあ、御苦勞さま」

茶の間の長火鉢の前に、順治が胡坐をかいてボンヤリしてゐたのが、笑顔を向けた。

「只今——」

膝を突いて、挨拶をしてから、

「お聞きになつて」

「あゝ。國へ歸つたつて？」

「えゝ。あなたに知らせる方法がないから、入らしつたら宜しく申し上げてくれッて——。大急ぎで歸つて來るさうですわ」

順治は、節子の言葉を一々笑顔で受けてゐたが、

「主婦代りは大變でしたらう」

「そんなでもありませんけれど——。でも、私、お金の計算が不得手なので——」

「帳尻が合ひましたか」

「えゝ、どうにかかうにか——」

「あなたのお陰で、店も大繁昌してゐるさうですね」

「まあ——」

「半年は足し前の覺悟でゐましたが、足し前は始めの一月だけで、後はずつと黒字ださうですよ」

「マダムの經營が上手だからです」

「しかし、雅子はあなたのお陰だと云つてゐますよ」

ラヂオ

婦人講座　非常時における女性

京城女高普校長　高本千鷹

軍國母性の龜鑑として、全國に感激の嵐を捲き起しました山内海軍中尉母堂について、私は非常時に於ける母性の晴姿を思ふのであります

殊に同母堂は私が學生の頃最も親しくした故久太郎君の未亡人であるので、私には一層感激の強いものがあります

「女は弱し、されど母は強し」とかいひますが、平時は柔しされど非常の時には毅然としといふのが女性一般の性情をあらはすものではないかとさへ思ひます

非常時に剛いものは平常は最も温和な婦人につゝまれて居るのではないか、こんな事について私の所感を申上げようと思ひます

愛國歌謠曲

コロムビアオーケストラ　コロムビア合唱團

（イ）慰問袋を（合唱付）　高橋掬太郎作詞　古關裕而作曲　奥山貞吉編曲

1（松原操）花と散る氣のますらをの、無事を祈るも國のため、千人針の眞心をこめて私は送るのよ

2　赤い夕日の丘の上、勝つてかぶとの汗をふく、あゝその時の一服に喫んでおくれよこのタバコ

3（中島慶子）僕に送るよ日の丸を、敵の陣地を取つたとき、この旗たてゝ下さいと書いた手紙も添へてやる

4（コーラス）國の護りのつはものに、送る銃後の熱誠よ、若きも老も幼きも、おなじ思ひの慰問品

（ロ）銃後の眞心　二重唱　久保田宵二作詞　江口夜詩作曲　中島慶子

（母）坊やお聞き上父さまは、お國のために勇ましく、支那軍こらしに御出征よ

（子供）坊は泣かないお母さま、うれし凱旋待ちませう

（母）戰する身の苦に較べ、暑い寒いが何であろ、守らにやならぬ故郷を

（子供）勝つて下さいお父さま、坊も神樣おがみます

（母）人の情に紅く咲く、千人針に涙して、宛名記せば夜が更ける

（子供）坊も出しますお父さま、讀んで下さいこの手紙

（母）坊は元氣な男の子、大きくなつたら櫻咲く、すめら日本のつはものよ

（子供）あすは[illegible]、坊も支那兵やつつけよ（以下略）

連續浪花節（第一夜）笹川の繁造

八・五五　玉川勝太郎

利根の川風袂に入れて、月に棹さす高瀬船、人目關の戸叩くは水鷄の、水に堰かるゝくひな島、戀の八月大利根月夜、佐原囃子の音も冴え渡り、葭の葉末に露おく頃は飛ぶや螢のそこかしこ、潮來あやめの懐しさ、私や九十九里荒濱育ちと云ふて鰯の子ではない、意地に強いが情にや脆い義理と人情は浮世の先よ、されば天保十二年、抜けば玉散る長脇差、飯岡笹川、兩雄を割る、噂へく〳〵し水滸傳

飯岡助五郎の一の子分須ノ崎の政吉は、笹川繁造の花會があるとの報せに少々の義理を持つて助五郎の代理として笹川方を訪れた、平手造酒、清瀧佐吉等の連中に迎へられて座敷に通した政吉が、助五郎病氣のため名代にお伺ひしたと助五郎の名で二十兩、若者中として五兩を差出すと、次の間から繁造が現れてその金は俺が預るといつて持つて行つた

政吉は成程笹川あたりでは二十五兩は大金なのだらうとたかをくゝつて廣間へ通つて。驚いたことには、四五十人もの親分衆がずらりと並んでゐて、國定忠次に極めつけられ物をかいた。そのうち笹川の子分がちらしを貼るのを見れば、大前田英五郎百兩、若者中三十兩など、五十兩以下のは一つもなく、はつとすると、飯岡助五郎百兩、政吉五十兩、若者中五十兩としたゝめてあつた。政吉は初めて笹川繁造の花も實もある男つ振りに心底から感服した。しかしこれから國定忠次と須ノ崎政吉の一騎打が初まるといふ一席

京日特選棋譜（15）

八段　高部道平　三段（二子）　並木鏡一郎

白二百七より黒二百二十二迄

確固不拔　覆面道人

諸取三目

本日は最々昨日豫報のやうに、白が黒から三目諸取と決定となつた

それは先づ先日最後の一手、白二百七は、白後手一目だが、黒先手の所だから、その點を先手一目といつて、目算もするのである。

手數を省く

ところで白二百七を二百八の所に、白が要するに飛粘たと、歸する所は、白が二百二十二と劫爭の手順に因つて、白四目勝ちなも目拔されるのである。がその劫爭のために劫立てなどで以下五十手も要し、それで止めた、と高部八段は云つた。が白三目勝ちも勝敗不拔だし、餘り變らずにあつさりと勝ちと云ふ氏の心境からであらう。

機敏一目

さて本日七黒二百八は白二百九の時、黒機敏に二百十と當て、白二百十一と繼つて、即ち黒が後手二目と成つた。そして白二百十三又白二百十五も白先手一目。斯くて以下黒二百二十二と、黒が最後の手止りだが、白二百十七で二百十八と行かないのも、前に云つた劫爭の結果を避けたもの

一算願ひます

そして全體の白地六十六目と白に黒二子の取石もあつて、合計白の保有高六十八目也。また黒地全體は白丸三子加算し六十二目と黒に白三子の取石があつて、合計黒の保有高六十五目也。そこで皆さんに差引勘定の一算願ひます。

明日原因明瞭

更に明日は白一以下黒二百二十二までを再録し、勝敗の原因を檢討して見よう。

けふのプロ

四日（月）　第一放送

午前六時二五分（東）全國ニュース

同六時三〇分（東）基礎獨逸語講座（十）

同七時一分（東）朝の修養　大阪の精神（三）山田[illegible]

同七時三〇分（東）ラヂオ體操

同七時四〇分　天氣見込

同七時五五分　朝の訓話　東洋大學長　大倉邦彦

同九時二〇分（城）氣象通報

同九時四五分（城）料理獻立（廿）鯛の若菜蒸し（鯛と落花生のフライ・清津）

同九時五五分（東）家庭メモ

同一〇時三〇分（大）通俗家庭講座（三）應召將兵の家庭に對する國民の務　大阪府女子專門學校長　平林治德

正午（東）時報・外

午後零時五分（山）祭文　奥州仙臺節の仇討　[illegible]

同零時三五分（東）國民歌謠

同一時　ニュース

同一時一五分　家庭講座（朝鮮語　釜山）兒童服の作り方　任貞爀

同二時（東）小學生の時間　二年　四年　對話劇　牛と馬　東京學校劇協會　むらさき唱歌隊　スバル合奏團

同三時三〇分（城）婦人講座　非常時に於ける女性　京城女子高等普通學校長　高本千鷹

同三時一〇分（東）教師の時間　學校演劇指導講座（二）戸倉ハル（釜山・清津）

同四時　ニュース・外

同六時（東）お話　スケッチを致しませう　山本鼎

同六時二〇分（東）コドモの新聞

同六時二五分（城）副業講座（二ノ十四）漁村に於ける副業に就て　總督府囑託　山本茂幸

同六時二五分（大）英語講座（二ノ一）（清津）宍倉保

同六時五五分（東）カレントトピックス

同七時　ニュース・外

同七時三〇分（東）講演　國家總動員の態勢　資源局長官　松井春生

同八時（東）謠曲　大江山　シテ　梅若萬三郎　ワキ　梅若萬佐世　ワキツレ　梅若猶義　地謠　梅若萬三郎　同　梅若萬佐世　同　梅若猶義

同八時三五分（東）歌謠曲　伴奏　コロムビアオーケストラ　合唱　コロムビア合唱團　松原操　一、イ慰問袋を　ロ銃後の眞心　ハ譽れの赤十字　二、イ決死のニュース　ロ雄やかなる突撃　ハ戰火の下に

同八時五五分（國）連續浪花節（第一夜）天保水滸傳の中　笹川繁造　玉川勝太郎

同九時三〇分（東）時報・外

同九時五〇分（城）地方へのニュース

同一〇時（城）地方へのニュース

同一〇時三五分（東）英語ニュース

同一〇時四五分（東）支那語ニュース

第二放送

午後零時五分　古談　宋迎[illegible]

同一時二五分　家庭の時間　任貞爀

同六時　童話　高在天

同六時三〇分　講演　黄[illegible]

同七時四〇分　現下の支那四題　[illegible]天鳳

同八時一〇分　軍歌のおけいこ

同八時二五分（平）西道歌謠　崔南錦

同八時五〇分　流行歌

同九時一五分　回心曲　河龍男

あすの聞き物　五日（火）

午後零時五分（大）管絃樂　大阪ラヂオオーケストラ

同六時（東）ラヂオ見學　陸軍士官學校

同六時二五分（錦）講演　元寇襲來の當日を迎へて　龜山天皇の御偉業を偲び奉る　陸軍軍醫少將　武谷水城

午後八時（東）講演　日比谷公會堂より中繼（日本文化中央聯盟主催講演會）

同八時四〇分（大）物語「元寇」

午後八時五五分（東）連續浪花節（下）